燕石十種

三座家狂言由緒

四輯

四

679
95

679
35

燕石十種第四輯 卷四

三座家 狂言每由 筆書

江戸書肆 須原屋茂兵衛

稚若

新發意 太敬

中村座

歌舞妓狂言 市村座

仏舎利

森田座

中村勘三郎
桜田義三郎

猿若

一ロキ 猿若ハ 狂言ハ 狂言ハ 大名ニ 成ル
人のまねをする者ハ 狂言ハ 彼ガ名ヲ 猿若ト
而ハ 狂言ハ 出ル 世ニ 申ス
ハ 名ヲ 猿若ト 伊勢国宮川ハ 者ヲ
ハ 名ヲ 猿若ト 有ル 工ル ト「ワキ」 笛の
方ハ 吹ル

寄 初ハ 猿ハ 若ハ 山神ヲ 祭ル ハ 山ハ
ヲ ヲ ヲ ハ 猿ハ いろ ハ
うれ 猿ハ ト「シテ」 ハ の 方ハ 舞リ

一シテ これハ今日は権君でまことに一夜留りて我らどこもかしこも
見まわしとして見物まで候家に私のたのふだ御方は
柳尾の何某と申す御大名で候 此方明日伊勢参宮
致して候が是まで参て候 急て参詣致し候
定めて 御けしきのよからうと存じ候 御暇乞しのたびに思召
様子でござるに参り候 ト 此門を叩き 幕の方をシテ
柱にかかりて 内へ参る
参る程に是じゃ ト 扇をもって門をたたく 御入り候へぬ
内に此方の亭主が出られて 左も候はば 御存じ
ト や 其や 参ろう
ト 門の内へ入 今こそ ト 御通入りして

イヤ返答はよれぬたのふだ御方様の外 されば深ふ御入なされた
めつさふに遠いところぬまで 御前様と思ふ世中 山 …
…ふる物じゃ ト 思案をして ヤア …
やろう ト 扇をひろげさし 出入 あそぶ
一ワキ 表に案内と申すは誰ぞで御座る …
たれにいぬ … ト 表の方へ
声で ぞ … ト シテ 大勢の方へ … ワキ 今の 案内申すは何者も
居ぬ … ト ワキ …
シテ 扇をかざし 是まで 扇子をとり
一シテ これの … ト … ワキ … して これ

一ワキ あらきむしいなかなふしやどふれ　ト〔シテ〕大鼓へ又隠れる　ワキ跡を追ふ

上下をぬけふふてもゆかさんへじや

ト引かへて車のそこまて〔シテ〕大きな声を出して

一シテ あらふしし　ト前よりて荒らくしくつぶしこなたへ追ひかけ〔ワキ〕さきさきと急ぎて見むなふ　あまり入りてあとより

一ワキ まづ月よりへぬあなたふ　あ通り給ぬ

一シテ それへ通り給へ様のあそふでしらり給ぬ

一ワキ シテ 又どこで　お目にかかりませふ

一シテ あの庭前のお茶の茶へで　ちょっと　お目にかかりませふ

一ワキ ハテ　げにもまつて　そのゆふなる

一シテ あそふしし　ト〔ワキ〕見つくしきあひ　シテ下前とまつて行き　シテ　揚りへいり迷ふ

一 ハテ　ゆへてらうその様めしや　あぶつく人とむ

ト身をだし　あを隠しなふに　こいしし　トシテこなたへ　ロキの　表へ出れも　見へり　ワキ　小声にて

いぬら

一シテ 表に馬や　のりお供ハ八人なれ共九人　ト思ふとそう　あさからしくふ

一ワキ ハテ　きさんらしい

一シテ 亀井がのふだる具足と　武蔵坊へと渡まし　ある　ト二度の　拍子

ワキも拍子をとりて

一ワキ あら頭の道具を住すへ渡まし　まづ　ト同し　いかし

一シテ ヤレこらやそれハ知らせぬ　トロキの鼻へ前出て　まつぺらなと渡る

一ワキ あらさし

一シテ ハここしく　ト笑ふ

ワキ　一あいさつ　面白き大名とたれへ出るとも
　　とうとんもたれとは知られぬが一つまめ勝と申の八幡宮とは
シテ　一はあやまりました
ワキ　一かるきぬでとらふ由をもワキ　ハヤ
　　あるとはなるほど
シテ　一さて　申　なに　二つ　ひり　作る
ワキ　一　作れはとは　とれ　申　とは　申　とは　とは
シテ　一　とは　二申　はひで　作る　じませ
ワキ　一　どうやトこの　かびて　ありんと　言ある
シテ　一　ハてこと　大きて　なるとは　なるほど
ワキ　一　こうやく　ひうふあれは　隠して　なれへ　いさで
シテ　一　ごぜんは　あく　まして　伊勢　言いと　作る
ワキ　一　あんどや　伊勢へ　まれば　こそ　宮　一　乃命　下　面白　かるで　さう　言
シテ　一　あと　一　強いと　ふり　ぬ　とう　伊　盛　と　と　申て　奇　と
　　さて　ふやに　かで　て　せ　て　と　上　下　言　為　ど　と　と　や
　　ちりめん
ワキ　一　荷　も　強　強　と　ぬ　だら
シテ　一　なと　ある　一　や　伊　と　や　や
ワキ　一　と　て　ど　や　ど　や
シテ　一　て　と　私　ら　と　為　ま　て　トてるよのう　ある　入　ろ　と　ど　と
　　なる　ぬる

ワキ　一　さて〳〵

シテ　一　そもさてさて京がいなかもとこんよ殿どもが

ワキ　一　こなたや〳〵こなたに殿さまは何のるすじゃや

シテ　一　よ殿さまはお知らぬ成程ぢやなら

ワキ　一　いやさてさて

シテ　一　こなたに殿さまは知らぬ事ぢやなら

ワキ　一　いやかう〳〵

シテ　一　こなたに殿さまは世帝のるすでかりやい

ワキ　一　かやまものとは世帝のるすでかりやい

シテ　一　アイ

ワキ　一　成程是ぢで成まんぢ〳〵けらりまがあるまさまぐでふ〳〵

シテ　一　こなたに殿さまは春の狩に出あると云やうを

こなたあるこの方こなたにあるこの方こなたにあるこの方こなたにあるこの方

ト申のまをそなたこの方こなたにあるこの方こなたにあるこの方こなたにあるこの方

ちやるり〳〵当りんせ〳〵つもこなたにあるこの方こなたにあるこの方

成程是の陽も見いてあるあれはスコレナア馬土荒えの馬とさく

引こなんせコレナアこれはこれはこれはこれはこれはこれはこれはこれはこれは

ワキ　一　なるほど〳〵こなたにあるこの方こなたにあるこの方こなたにあるこの方

こなたにあるこの方こなたにあるこの方こなたにあるこの方こなたにあるこの方

シテ　一　是ハ高〳〵ト是とつまり〳〵

ト申のまをそなたこの方こなたにあるこの方こなたにあるこの方こなたにあるこの方

ワキ　一　こなたにあるこの方こなたにあるこの方こなたにあるこの方こなたにあるこの方

ふんそぬるい居風呂もさてくまつく湯もふんで

一シテ 何と御合点が参たか

一ワキ いかさま是は何よりの望じや

一シテ それならば是程嬉しいと思はしやらう トいふて しやめ それなら嬉しに思はう

一ワキ これはこれはあまりありがたい

一シテ それならば語に トいふて イヤ 申事が有

一ワキ 先しまいぞろふじや 扨此上へきこえぬを申さぬ情ない

一シテ ちつとも嬉しうもたんと大事でも 同じ事じや 嬉しい

一シテ 嬉しきふしは此身の嬉しさに語で御前に出でたる

一ワキ それならば福の神たいとふぞ大切に

一シテ それならば嬉しいふ心の望しかしの神の中へは我等へもとゞけ

めでたいじや

一ワキ 面白し それなら万事に頼んと

一シテ さあらば トいひてワキを扨いるあるかとあらせ あるまいの ワキさりける

共 ぬしは其程に付たらば ちよいとまたかくも

かの事それぞれどふか神ぞちよいとまたかく

トワキ せきにかゝり居るを見る

一ワキ あら〳〵

一シテ ハヽヽト笑ふ

一ワキ あらさし てゐあてぬ あくてあるくあるまいさきへ出あろう

シテ　清ゆるさんまさせう

ワキ　八幡さらぬゆるさぬ

シテ　あやまち清しう

ワキ　一　水上やいの

シテ　ちごぶまふ　ちいのさいあるこてさんでまうさ

ワキ　ロこうせうあるべ　そこへたうまいるふいあるこう

シテ　我一　ぶいぶ　我が唱へ　我が子行ものあるこうあつしや

我ぶ　ものかふこうあるんが　あるこへ　ぶんから

ワキ　何といふるやらふてさうせあるふ

シテ　初もきつんあ腹をうあ　我がわよあれうとヤ　我りうと

清ゆるい何わつまそれやと　清ゆ成ふんのや　でんりあす

ワキ　ふ　いつでもとうろ

シテ　ちゆ　ふ　ふきがふ　人へまもて

ワキ　我ぶ　ものあるこういつこうもう

シテ　何ぶでくるあん　ワキ　一　こうじや　ト腰を掛へ　そうもうる

シテ　ハテ　ふきこるこるふ　そうあること　ものでんりあ

ワキ　あらこうヤ　ヤ　まいるじゃ

シテ　こうこまうあさ　ふ　我ぶ

ワキ　何わうちれや　ト立ちそる　わるる

シテ　をうかしてあるあれや　ト泣く

ワキ　あらこうをふかうあれあうろう

一ハ（シテ）　一ワキ　ぞつかるさまめをもろう

一シテ　是い五領陸地ゆる。さまもた

一ワキ　ものもどやもとろう

一ワ　こう座めう　さぶい　一シテ　ハアハ　ぶつかるワキシテの　命をうて

一ワキ　いらかも　一シテワキ　ハ〻〻ト五人　ゆふ

一ワキ　ゆうまくぶ　我の大明〻　ゆたいぞふぶや

一シテ　行うまく是湯の　橋へ　うるもんと　橋を　ぶ〻ぶ〻

山うふ　我ものを　ゆう〻　和〻〻ふ　鋼をし　ものを

その上を　ものを　ぶ〻ぶ〻　ものの　おつて　ト方と　ゆう

あんどをうれでムう　ゆ

一ワキ　ものを〻〻　ものあんぞ　行のと　一シテ　ものと

ぶう〻〻のこん　車に　ものを　ぶんの　せう〻

行をゆう〻ゆも　ものれまいよ　コイ　さぶうを　ものを

いうも　ゆ〻〻ゆ　我ものゆ

引　和ものを　ものを　ぶう〻ふ　我本の　ものを　あゆの

車に　和ものを　ゆ　ぶけて　コイ　さう〻　コイ　さう〻　コイ

さぶうを　ものを　ものを　ゆう　頭ゆ　ものて　命　あをやもの

ゆうの　ものを　ものを　ものを　ト　ゆ　ものと

あんぞ　ものい　樽　ものを　ものを　ものを　かんをある　者田

三番目　法師ゆ　あ〻　ものも　ものを　ものこを　あをう

さけれどはなれぬ　事ゆもかゝりしも我が君様
人がうらみしうらみしきて　人がうらみしうらみして
居ても山居を　拵られしたよあんがしまうしも
浮じくるしきまどあふくうれいうしもまし
実は二世や　三世を契りし仲を　山居でかくら
たらきくられく

一シテ　ますらをの猿川があしじや川く　両はうも舞わせさ
猿は山王　まさるめでたや　めでたい繁栄たえみ
玉まやもし秋　猫まきぬ　まきそくちふ石小川
さゝめのしらふみ　面あそくゝ　泉水廊下　万里の

間も幾万たり　枕く座の　あんまをいんれどこがるゝ
のちどりけ十二の夜子がもとでもしとうて八八ツ
格子さらふたり　吉妻りの文にえたじる
くあらし　うけどりや　やさしふ面ぶさくほね
りど　ちらとゆふまりしきみよのや　まさふかん
久隣のめされたりや

一シラ　のうたうや　猿若や　したうや　君たち
天の岩戸のあまみ江戸まで　御祝そろて栄えませり
ちよし

一シテ　さてそれよりも

ト是より　あ[illegible]の　柳ふを[illegible]の　舞いづきも　伊勢の　三原あて
ワキ　ワキ　なを〜ぎ　あり　ふさ　ふて　ゆ〜　ゆきて　つふ　方まて
舞のすとと　ゆきも　たつ　ぶき　見へ
又　月　見も　なを〜　ちかた　ちる
ワキ　あも　ちろん〜　秋　月　て　月　あたふ　五つ　と　月　あ　い　れ　ふ
まんま　シテ　ハアヽ
ワキ　まいま　シテ　かしこまて　候〜
新發意　ちか　敵
ツレ　柳　ちか　ち
シテ　中村　明石
ワキ　柳　ち　ち

ワキ　是は　淡路の　国　ふ　住　い　侍て　ゐ　ん　ち　ち　ま　ま　ぬ〜
たの〜　ふ　ち　ち　ま　ま　ま　ま　け　ち　敵　ち　の　か　ち　陵　の　内　て　も
敵　ち　一　内　ま　ち　ち　ふ　ん　ま　ま　し　ま　て　ゐ　ん　今　日　は　山　ま　ま　ま
ま　ま　ち　ち　ま　ま　る　ま　ち　ち　ま　ま　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
ま　ま　ち　ち　ま　ま　ま　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
シテ　ハアヽト　ワキ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ワキ　ま　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
ま　ま　ち　ち　ま　ま　ま　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
ま　ま　ち　ち　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ち　ち　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

ワキ　[illegible]

シテ　[illegible]

さめやんなんとまん思案でムりやうふ

ロキ
一 一暁と出来心 是ハけいこしや 稽古の見えい

シテ
一 かしこまりましたト あくびをしながら

これハ稽古の稽古と 稽古で何をきるたいこの つみでとめる 夜ニ目をさめ

稽古ハもとより知恵でムりやうが

ワキ
一 あつぱれかゝる知恵のあるものを思ふハ あれが女の女房じや

法師を大事にせい

シテ
一 かしこまりました

ロキ
一 いつけたぞ

シテ
一 ハア ト ぶたいの 中くらゐ

ワキ
一 扨も鐘楼の事のを思ひ出しふなさき いきさへ いてムかる

エイ〜

ト シテ 表との でかこていろ

ワキ エイ〜 とらへあぐらをかゝる

一 さふいふお言葉 志しめまで ヤア モウ うしろつけしいつゝの

見へぬで大切な鐘の番 せつかくせいが夕暮ハ 小坊主

元と一ツあつて 経を申しゐるので 居ねむりが眠い

稽古はおもいや 稽古まちまちて 経をよみかけ ふこねく こくりや

ト 寺の坊主つかいで まなこをこするあくび まことをきつぶし 十二度まわり あとをつき

是でハどうも眠られぬ 和尚も今に帰るまいと思ふよし

さつとだんをあかる ト ち鐘の下 あたくし

うとましも いさまれから 木枕の夜や 接待の時 扨も坊主

見れバあれは 和尚様

月雪花よりも まして 恋しい中 和尚の今に帰る

もん思もきくしも 去つて 先年の 五十年の 草花とも百年

しておやく　ト桃をもつて先へ出て見事して　兼斎　イヤく　判官の云分じや
蔵人是　何ぞ此桃がまゐるのじや　いつそ　杯をせう
ト舞台へ置く　又蔵人もさきへ入　取つて
ハせんく　桃を取あぐる　ぬしはたれぞや　さらば
ちり　桃しのぬしぞやらしくるるそなたぞ
やらしくるけや　ト桃をもつしいて蔵人が背を　しかくいひ出る
一ツレ
桃も此ちとやらに　経唐をする人も　来ては此　山水で　御座ん
トさらばとて拝し　ツレ　此島は隠いて　仏もいふほどに　経も蔵も経典の
唐の経　秘蔵される　楽の太鼓は　両もなく　奏楽
じやとふつく　今日は　何の　桃をと来り　唯今参りましたん

蔵人とねるエイく　首尾よふ蔵人もあつかれば　よふ御入が　隠が
不仕合せんなら　ムルが　ありけん　中川を　通つさそし　何やらに
ちそうに酒をもつて　蔵せしと来下して　此だく　おまゐりました
ト扇子ひらき　こせる
ト此ところ　桃の蔵人を見て
トのぞき見て　イヤ　たれも　いぬぞ　イヤく　見ゆれば　たれく　なるほどか
参るシテ　蔵人ぞ　しつ川
一シテ
いや　お経に気がつきまして
一ツレ
南無三宝　お経が三部が　つきまして　いふほどふる　暫くまませう
ト先へいて　イヤ　蔵人　そふなる　トさらしほしして　来るはしる
一シテ
これはさてもく　蔵人もしらるるのじや　ト蔵人をいふ　して　桃の木
一ツレ
そちや　蔵ていつ　ぬすらふそふな　是へ出さうば　此つくろう

（ト扇を出し）さてさてくつろいでくつろいだや（ト座に居て）是はさて今のも
掛物をふるう事、人どもあおぎさつさつとおとしてゝ（ト右脇見）見つけ
嬉しや　あれは大事の物をいつき見ゑてしまつた（トつゝと右脇の　シテの見と）
一シテ　あらうらし　是はさて是は大事ぢやぞ
是にしては心苦しや　たれぞいふて参らん（トまゐるとて　ワキ追て行く）
一シテ　さても物が　今おれ物知らぬ物なれば大事な物じゃ　申し
物が破れてはアヽいさゝかも心つきして是は大事の事
と是を隠しまする　されども是はさりとては見て居る
ても此事はどうする（ト大事の掛物を見ながら居る）
一ワキ　やしあさましや　どうしてもいつそ和尚様に　あやまろ

扨はまゐらする此事見つけてたまし　茶子を大切ちと出し
ある此あひて言ひ入れば許しませう　御茶の湯の飾り
そのさらふ事也
一シテ　あれなるは何者じゃ
一ワキ　いや今は小姓でござる
一シテ　左様の者ならば今すこしは和尚は留守じゃやら知らぬ
一ワキ　是は和尚様は格別な所へ御出かけの御茶会でおじゃる
一シテ　成程是も名じゃ　かめつさ留守なれば
一ワキ　あれはまいは和尚の使に来たのじゃ　こちとあけてたもや
一シテ　なんじゃ　和尚の使に来た
一ワキ　入られ
一ワキ　いくつも
一シテ　使でもおつしやらぬさかい　格子のを出て

[illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

ト云つゝくりのむ

シテ 一 それハ我がのが秘蔵じやこちへおこせ

ツレ 一 いやこちへおこせ　シテ 一 こちへおこせ

ツレ 一 アヽ酒がこぼるゝ中よりして酒を呑ふまふつまれト

盃と茶碗の中へ注ぐ

シテ 一 どふふおれがのむまいといふ此様な者の

ない酒でさへ呑ものゝ呑ふ者がまかふたまるまいぞ

ツレ 一 なんぞ肴ハないか　シテ 一 どふハ去ぬ見ん ト立んとよる

ツレ 一 いやこふされてをれがあふらふていてハ果しがつかぬ是から

肴の代りよ面白を云るがたがひ違ひよ呑ふ

シテ 一 是ハ面白ろふ我ハ何を面白ふいふぞ

ツレ 一 おれハ肴の替りなまぐさひ事を精進での料理によそへて

言ふぞ　シテ 一 こりやおもしろからう急げ〳〵

ツレ 一 さて又そんぢハ何を面白ふいふぞ

シテ 一 おれハつぶりだけで草木で面白ふ云ふ

ツレ 一 よろしい マア 我らいへト 盃を例へ引出ス

シテ 一 合点じや 橋の詰見 柿の本に人丸 山邊の赤人を呑ふ

ツレ 一 出来た 大友の黒主 鴨在原のふかき いろあれ大臣いしまもの

やま丸 さる丸太夫の田村麿を呑ふ

シテ 一 猿丸の猿ほうり 薑の仲丸 在原の業平 文屋の

康秀 喜撰法師 梓子のみつ子 海松の松

蝉丸 坂の上のこけの里ト呑

一ツレ　おるの解らぬ所をみると張屋たばこ屋の隠居　鶴さん　昨夜の金毋菊丹の皇光上於の　槍　ゆけ
八幡鶴と　鶴の次郎　鶴　八幡　武蔵坊
弁慶ト　出る　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
一シテ　竹の隠居　鶴さの　有り　きさの　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
山　ハ
みるもの　ハ
一ツレ　ハ
一シテ　ハ
一シテ　ハ

一シテ　ハ
一シテ　ハ
一ワキ　ハ
一ツレ　ハ
一ツレ　ハ
一ワキ　ハ
一ツレ　ハ

[illegible]ト言ふてせつかんしたところ〳〵
[illegible]の花の衣がある二番目ふだいの百ふ（シテの衣を花衣と言ふて）
[illegible]（ワキ）[illegible]
[illegible]ト言ふてかれがものもんを
[illegible]
[illegible]ト問へば入きもをけ一方〳〵を
又て山ぶちの見あとを見て
見へる見えは新でちめぶ衣をたづれば面白あれば名沼
の衣もちの桜山川のもきよ〳〵

（シテ）おの〳〵山桜は出来〳〵でそふぶ　（ワキ）一なをとらふぶ

（シテ）もちの見えは出来

（ワキ）こゝろ主をたづけよもちろ

（シテ）たゞけよもちろとふイヤ是は衣がたい衣なもゞ　どゞ
けじやゝろのろふ面白ふ　（ワキ）ゆるされませふ〳〵
（ワキ）ゆるされませ不でぶ　あいけもゆ　秘蔵の桜ぶぬ
ちまれ祝ぶて　ぶ〳〵ものるゝじゃ　月面白かりぬ
出てろせふ　（シテ）ゆるされませふ
（ワキ）出て〳〵せふ〳〵ト夜ふて行ぶ〳〵まで出まく
ワキ夜〳〵出て夜ぶんとまろ
（シテ）是は〳〵〳〵〳〵ゆるすじゃ　ゆるす酒ぬ　ろ〳〵ろ　ろ
ふ〳〵　ア〳〵　ぶ〳〵ぶで　ゆるぶんの出ころふ　ふ〳〵ト
独いろを見て出〳〵　ゆるまたのふ　ぶふ節　宝所の世と
面つて　時十二三の四人を見てあれいぶ　まる

つぎしやうとおもひまして是を小舞にしてさゝれうつ
て御きげんをなをしませふ
（分）川ばたがやなぎや　室町なかへよりやちがつて
八条の人はやるな花の　加茂堤にはつらせト
ワキの方へシテ行　顔をみる
ワキ　一　あつちへうせふ〳〵ト　肩をおして又橋がゝりへうつちやく　ぎつくりとして元の座へ来る
シテ　一　是ハおそれ又御きげんをなをさうと思ひ兒の舞をまひまするが
ちつともきこしめしやらぬと思ひまして舞ふが舞で
御きげんをなをしたいものじや　トおもへんしてよいわが
ある年の夏の比万般のため同書を御らん有し時

驢馬くおはしまし一ぱうと雪梅娘であらう小舞が
おなきでもまだなほしけしきを文句にしてうたひて
御きげんをなをさう
へいかにもかれとも驢馬ハ名所　囲みにおゐて
施ごりとほどハ君よみ覚るものきみふかゝし
海の底のことト　まづワキのそばへ行　顔を見る
ワキ　一　あつちへうせう〳〵ト　肩おしてうちあがり橋がゝりへうちやく　めんぞう　かたの所へ来て
是におそるよつて月にかゝる眼顔へ行ふ　ト笛の座へ来て居る
シテ　楊貴妃の中極にある　一　シテ　萬歳ハぬりをしてくゝ何とせう
是からハ踊り拍子にのつて御きげんを直さふト

こゝゝゝあちゝぶを
ぬゝゝゝゝをりざし　所者の〳〵者一の秘義なる楽祭の
古穀をあつらへて　塩鯖よ出あつらへ〳〵かゝう物ふ
よゝゝ〳〵新穀ゑびが滝出る〳〵　ト三味せん猿若の狩る
を面白がる

一（シテ）抽それよりも　ト是より俗按猿若の狩る新穀ゑを舞ひて
三味引二度用ひたいこのちちを持ち舞ひ合せる
是よりてうれワキそろ〳〵出るワキ〳〵うれ出て衣と冠し
あるかのまねをしたちをもちこゝをつゝをけ用ひしの情ようシテめ衣を
ゑゝゝとどゝ合方あてうちをもまんまて
ワキ　これハ何とさるぞ

一（シテ）がりきめるよもあ

ワキ　こまや　をれ〳〵やうん　一（シテ）是ゝゝ

ワキ　でゝ〳〵　一（シテ）ぢきげんハ来ます〳〵

一（ワキ）きげんハ　ゝゝとうゝゝぶで　一（シテ）ぢ機嫌ぶ　ア　ゝゝ衣
まで出ます〳〵

留　三味線　新　大小　古謡

寛永元年三月十六日中務宗四郎
芝居出来

市村座　家狩言　寛文二年

海道下り

右近源蔵　（シテ）　市村竹之丞（ワキ）
同　（ワレ）　ゝゝ

一ワキ　昔いかのが〜と申長谷寺で山に本尊海入て　ちく分
あまさまする名所ちんと思ひかけく下りたひとなて
ふんが明方実上長日まんめが夏下り升ふとゞ升る
やり〜古郷に望有あるら

一ツレ　あまつる　一ワキ　祈んの〜そやうさいよく〜明ふ
夏ちつふと思ひ行ものの

一ツレ　まい一限ちふふりかふ天気もやや　丁日出発で
ふり升ふいよ〜ちゆ九月九日も　あ重でふり
升れり　一ワキ　成程ちふふよや　ゆ人追ゆ行ぶ升りで
ちふ〜ぶ名所のちふ〜ちぶ一〜ゆの　なの〜こてあふ

一ツレ　ち野でふ名所ちてちゆ九月九日ち　祈て　ちあも本尊
海ちふ〜ふ名ます〜さり

一ワキ　イヤちゆ九月九日ちつどのふ名所ゆてあまさの西〜の
名所ちふ〜ちてこれども本尊海ちふ祈ちてこゞや
あいある

一ツレ　ちゆ〜九月九日ちつ全も　ちて〜めてぶふり升ふハアヽ

一ワキ　ゆい〜九月九日ちつと永日も　始て下り　望ゆと知ふいでし
ちちゆが上へまちて本尊海ちふの　楽ゆちちなて　ちち升ば
時分の伊代に知ち人ちも　ゆつちふ〜もいちちゆと　いふ
ふでふふふちちゆが　今ふ知ちふかがちんぐゆちゆ

一ツし　なぜ私ちがひまして
一ワキ　さんあふちやうと　対ぜんでもいつて　海ぶ　知つて
いるかしら　生まれてからのふふん
一ツし　何のと　隠しまして　私い　まろ海ぶ　焼くぶ　ムラサキス
一ワキ　それなれど　そなたふ　海道　ちがひて　異国　知らぬ
一ツし　ちがひでムラサキん
一ワキ　それは　海ぶ　そなたの　異国と　存じて　なるぶ
一ツし　そなたは　海ぶ　ちがひて　古歌の　ある　名所　伝
聞　歌　ムラサキん　ふさぶ　お聞　ムラサキて　存ずして
聞つまり　海ぶ　ちがひ　海ぶ　ちがひ　海ぶ

たとへ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ　又　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ
同じ　名所　名所　名所　ムラサキ　ムラサキ　海ぶ　ムラサキ　ムラサキ
なぜ　なぜ　今　ムラサキ　いつ　なる　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ
ムラサキ　ムラサキ　ムラサキん
一ワキ　何　なる　なぜ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ
一ツし　ちがひ　ムラサキ　ムラサキス
一ワキ　あれ　まつ　ムラサキ　ちがひ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ
一　ムラサキ　名所　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ
今　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ
一ツし　なぜ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ　ムラサキ

一ワキ 一所とまいりのと云ひ出し　是は海ゑてちもとさへ
ゆめて案内と書とめてはどふぐふぐ
一ワシ 是は一所の出家まで仏りん誰が為ておりやるか
一ワキ 云ひ出し　某伯母はあまでおりまして　元へでくらい
ちんとあぐごふ所ゑでいるいら
一ワシ 事なるるがムりまいん　はるの旅ゑの為ひゆうてあぐごゑ
ゑ為ゑ所ゑ　紀に為まゑ為て　五ア　はるゑ
是へ為　一ゆりふる
一ワキ ゑれはゑ為ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
一ワシ 為ぐゑ　自イ　は　為て　ゑ為ゑ　ト　は海浪の為ゑ　シテ　為ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

一ワキ 伯母は為ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　為ゑ
一シテ ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
一ワキ ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
一ワシ ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
一ワキ ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
一シテ ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
一ワキ ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
一シテ ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ

ゆるてはたらいふ所なしと云まるはあるまいとてとゝろふはさて
陽くのふ若者を頼るでムろふ
一ワキ　たゝかちどいさい陽ろてもり　トツレのうた　一いしうとゝろふ
一シテ　所ふ一田りあれはさで〳〵ろも　型でろふ
一ワキ　能ろに見ろる人くろ若者と陽ると山ふぶまつ信無自ろ
あ陽ろ所　一シテ　まづたゝ〳〵めて型　一ワキ　見づ
一シテ　私〳〵ぶさ〳〵ふ〳〵有ろ所ふ〳〵ふ〳〵有で見ぐ
一ワキ　あ若者でムれぶ一ったぐ私ろ
一シテ　さこ〳〵めも〳〵　ゆろ所ふ〳〵ふのろ　ろふぶ十陽ぐのろ若者
ぶムろろ　ろろいも信ろと　ろ若者の陽ふ分ふけろと

中仕〳〵あじる夜陽ふふ金ふ物馬生ふもとくと中仕さ
人生のふ人中きれ
一ワキ　信中の中あ中中中でムり中ストロ陽ろ　サ　今ろ　ろ中あはふ
一シテ　見ムふ所ろ〳〵ふれぶ　あさ〳〵中ふ　陽ろ型ろ陽ろ〳〵ふ〳〵
まで若者ろ若ろ陽ろてろ陽ろふ袋ふ信ろ中も
かろふ若陽代ろたろふでめでこふろすでろ中ろ
一ワキ　たれでムり中　ムふ大型でムまぶ一ト　ふたろまでまろ型
トツレ　ろてつ　ワキ　陽ろ中ろ　あでご自ふ若者ふ陽ろの中　舞ろ型
じゃと陽ろ中〳〵れろ陽ろの中　陽ろてと　恨ろ中ろで　陽見ろと
いろ中め信ろで一ト中さ〳〵ける中ふ

シテ
一上まどやといたこゞ四ッ　居ッ　時のもあるひ出せば
なつらしいとのどや　旅を行ふてとゝ　思ひ出ども何とゝ
ワキ
一元来不思議ッ　仕れん
ツレ
一こゝはとゝ私も為てあく仕ればこそ　あぐこ見る面白ふ下の
あんあんを取ったふ山ふ出て
ワキ
一まゝのち行まづ　一まきッ　陽ふ帰れく
ツレ
一筆用と陽ふ行ふ孫つや　ワキ　イヤ　奇妙
ツレ
一筆用を　トワキ　変りたる奇特のいざ奇妙
シテ
一いぶ思ふて行ふの為よ　左市に行者
が百姓ふ下ふ筆用を小明神でやふ

ツレ
一不思議　トシテ　ばやく　トツレ　歌ばかりの　シテ　有の自はそり
シテ
一あるふ海ふ下りや
ワキ
一行て得ふ思ふ　加茂の川　うもとう
野ふ下ふ　高ふ木ふ所ふ　ふ所ふ
ふ下ふ　細ふ　ふ　ふ
こよ　ふ　ふ　ふ
此ふ神ふ　白砂ふ　不思議　閑や
ふ　ふ　ふ
ツレ
一よしや　シテ　ふ　ふ　ふ
トふ　シテ　ふ　ふ

一シテ 見物人[illegible]へ [illegible]

ワキを急つけて のせる　岩[illegible]　つく出

一シテ さらば誠の[illegible]たのむげに[illegible] [illegible]

菱田座　家村[illegible]

仏舎利

シテ [illegible]

同　菱田[illegible]

一シテ 是ハ此あたりに住居いたす何某と申者でござる子細あって 仏舎利の宝塔をうつしを持てござるが 持ちまして 仏舎利を[illegible] [illegible]の[illegible]三條の大臣[illegible] [illegible]ござる [illegible] [illegible]でござるが [illegible] [illegible] [illegible]今日も[illegible] [illegible]大臣やいはる[illegible] [illegible] [illegible] [illegible]でござる [illegible]金剛[illegible] [illegible] [illegible]

[illegible]

我元と尋ねでゐないが和〜と云てゐる事でムイヤ
我ら云ひ〜ふ事でゐて居めも〜や〜
一ワキ　ハテ三條の大橋やでムン誘ふ我まるふ長者てムン
何事も人の仕でムン和の者迄よ百迄の代ら迄儀利
を取つてムンが為ちと乃つ〜句いてゐれど内ま何も
ムらぬ気ふふとぎきふ仕方でムりやく仕形を教て今日ふ
百迄ゝ金を有なくて有る上あるきるぞう我和ゆて
異もとれるもふ力取ふでムン大ろ〜得ぬも
人ぞ〜いぞんで内取るまでムン百迄るぞふ元仕る
きそ和らても今〜力ふの内ぬるるぬども和の仕ゆ〜ムン

イヤ今ふ和よハテでムン三條の大橋やでムい内ま
一ワキ　ハテいそや大橋やムが今つ〜ふふるムン人ふ〜面ふふ
イヤ〜ぶたんを尋ぬ〜ゐる〜百ふ和
百でゐふてゐるこめませう
一ワキ　いつまでも男ぞ〜と和ゐる
一シテ　ハテ大橋ゆ後ふふ和ふ面ふ者い
一ワキ　面ぶいでゐんとふふ〜ふ和ふ者ぶ
一シテ　まづ二つあぐうまま　ト云ワキ和ゆて
一ワキ　和〜ふ和ふいつでもムんつ〜ふ男ぞ〜ふる者迄ゐよ
今ふ〜ふ内ゐ〜て三日程ふ参内でゐるぶ一ふ左ぶふ

シテ
一あがりませ ト 極まりつぶって
ワキ
一大事でありやるが ト のゝ
有さるとは 有さるが なれども
元来この彩と見ていさぎよいそれぬ
シテ
一そうとあがりませ
元来こゝ仏会に礼をいふく 有まぢ ト 面 ― 仏
シテ
一仏殿へ参ます ― れら 初月 あんまり ― 上ぐ 三度の人ちや
どの有ばこそ 明き 為 面 ― まー〳〵
ワキ
一まいさこゝ 三度の人 ― ゆ 成れいそ ぞ ― て
シテ
一こゝ仏事 連 ― 為よんもとゝ ― 仏 ― ぬ 成 成る
長有るれも むづら ― う も 有と ― やるまりてだ
たんらうまー〳〵 陳 文 祈 連 ― の 印市まで られを 有 ― や
二度 祈 ― 報 ― ま ― ぶ ― ふに 仏 ― 有 ― ら 祈 ― う
ワキ
一 ― れば ― こ ― 有 ― 祈の ― ゆ ― ま ― の ― ゆ ― ぞ ― 印 ― 〳〵
そうぶ 祈 成 ― こ 有 ― や れ 有 ― 仏 成 祈 ― 〳〵
シテ
一仏 祈 ― 仏 連 ― 為 祈 有 ― 有 ― れ 祈 ― 仏 有 ― 祈
ワキ
一まい ― ゆ ― ま ― ん 有 ― ま ― た ― ん が 有 ― 〳〵 ― こ ― ん ― ど ― ぶ 仏 ― 会 ― 利 ― を
有 ― そ ― ふ 祈 ― ま ― 有 ― 仏 ― と 有 ― ― て 有 ― や ― れ ― ト 面 ― を
シテ
一 ― て ― 祈 ― の 中 ― か ― つ ― ま ― の ― う ― さ ― ぬ ― て ― い ― ふ ― ま ― が ― 有 ― る ― ま ― の ― う
祈 ― い ― ま ― せ ― ト ― ゆ ― こ ― ろ ― く ― ま ― と ― ら ― れ ― る
ワキ
一 ― そ ― ん ― ま ― ん ― ま ― あ ― ら ― 有 ― る ― て ― た ― ま ― ら

一シテ　はいとやの下の間に居る所へ引きぐんぐんとさしてはと引きぐ
ぐ
ぐ

一 シテ 何とぞあまそ　一 ワキ いつそふこの名ぞ武の侍ふ名ぞ

一 シテ 是は信濃の国善光寺の下でゐる者の月でゐる者ス

一 ワキ 扨〳〵其事〳〵めさるゝ

一 シテ 若の方よりほるをそりそこいさ〳〵申ふ　一 ワキ 一つをとゝもつぜん

一 シテ 若のさんはよりほるを者そ　一 ワキ 其のびつま

一 ワキ あまりそこつゞ無をそこそ

一 シテ 是をもせめて別所のべて明ト張く

一 ワキ 是はめつくる入物の隠ト有あれ　せめつくる

一 シテ 扨もいとせる〳〵うたうさ

一 ワキ 扨〳〵なつて何のそこいふ　ト物語の内に隠れ　ふれ〳〵隠線

一 さあ〳〵又私うぢ山人物を隠慈悲て一つ隠して所

一 ワキ 何不でも仕ませう　是をもせめて別所のあそ　ト隠

りをもそこのせめつくる　ひ物のをとゝもつらでであるぞ

一 シテ まアそこせいとそこ　いそこそとも牡丹を隠慈悲あまさ〳〵

ト隠なをかけて　一 ワキ 扨〳〵いつそとも天るる牡丹をる者

牡丹をもそこのあまさ　ずと人〳〵あまさども比類るだいこん

ふいるんとゆるの牡丹　今のそこ花そこるまいつ　やるいるこ

ふ源氏のをでゐる　ぶたそるまいつ

一 シテ 歌の中でも五の中でもたゞ〳〵そこの心〳〵そこる

ぶまいみよう書ものそこい四季の形〳〵　ト人物ト　さあと

[illegible]

牡丹とあやせても白玉花多ふる牡丹今のせる　舞いで

[illegible]多しいらるる　[illegible]

一ワキ　[illegible]

一シテ　我ら花をるとて　和尚事有る花ゆるゆ　毒の[illegible]

唄　いかゝる見るも　[illegible]牡丹花をいづれの人も

[illegible]

[illegible]

[illegible]

江都三度飛脚書上寫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右辰三月三人ニ而被仰渡候書付
其同日月十日右之書付ニ而
相勤ニ成 信濃守殿
其同十八日四人ニ而右之三人以上
乃右之日ニ而被仰渡候中間

堺町横目三郎兵衛殿
右徳川様御代寛永元甲子年二月 御書付
内郎ヲ以ヲ地面
右郎ヲ以ヲ地面 伊丹内横目ニ
右御代寛永十年 伊豆守殿

内御書付ニ入国ニ節金ニ而
之ニ而本町ニ言所
御用ニ付 伊豆様ニ而内町ニ横目
内禮ニ而 使ニ出代ニ 相勤ニ
横目町ニ言

右横目ニ長谷川横目ニ
ヲ以ヲ地面 高三郎ヲ
慶安四年 寅年 四月ニ
御横目様ニ
横目ニ成 寅年ニ
横目ニ成 寅年ニ

[illegible]所ニ而ハ世間ニ[illegible]ハ 明暦三丁酉年 正月十八日
[illegible]類[illegible]ハ同[illegible]ハ[illegible]
内裏[illegible]ニ 百世[illegible]百度[illegible]制度[illegible]
[illegible]為 御[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世尊相之 村山又三郎常 即名略ス百五十人ヨリ

所東八代ニ名字数九年二年ニ百姓ハ右村山九郎太郎ト

中代ヨリ竹ヶ東名改ム長今ハ 相傳仕ル右又三郎ハ私

世之居之 祖ヨリ即及居

又祖 村山又三郎 村山郎太郎 方村字長

方村竹ヶ迫 方村竹ヶ迫 方村竹松

方村長右郎 方村字長

右之通也

文子保十七年六月

方村竹ヶ迫

義田馬保中郎常

移ス世之居ニ之中ハ年数ヶ所ニ乃次ヶ年ヶ高子

年 也六十年 百姓ハ右郎ニ右郎ニ右郎所 六十月ニ

世之居ニ 移ス之祖 坂東又九郎 百姓ニ又七郎ト右郎

高橋ヨリ 佐藤ヶ郎ニ右坂 佐藤ヶ郎ニ又七郎ト

居之ニ 右郎ヶ郎ニ 佐藤ヶ郎ニ 又七郎ト

世居ニ 烏帽子ヶ郎ニ 相馬ヶ郎ニ 辻郎保ト 渡ヶ郎ト

紀ヶ代ヶ郎ニ 移ス東又九郎 居之 右郎所ヶ郎ニ

文保十七年六月

右郎所ヶ郎ニ

東人ヶ郎ニ

高橋

辻郎

又九郎

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元禄

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二代目

[illegible]

寶永八辛卯年九月三日[illegible]

[illegible]

[illegible]

名題、不詳

三代目　權之助

御免立番仕る　甲寅年

印年に　御奉行所より

三月朔　御免四郎兵衛殿御奉行あるて　同二十七年迄

元甲子年　迄奉行役

四代目　權之助

寶政二庚戌年二月朔　御免本役所　立番あるて

同九丁巳年迄奉行役

五代目　權之助

寶政十二己未年八月朔　御免文化元甲子年四月

迄奉行仕　寶政文化之頃年　朔　御免　同九丁巳年

十月迄　五代目仕　寶政文政元戊寅年三月朔　御免

文政二己卯年秋

立番仕　佐渕樣

奉行　馬場

然る男子なき

元文年中なる

世々つゞき猿若座家ふつゝへ宝を授家しこゝぬきゝ新
古き物云を見物し弥〻ゝ名れハ之ゝ恵き家〻後
うゝる天ゝゝゝる人ふ〻ゝんと祈ゝ祝ゝ

甲子年

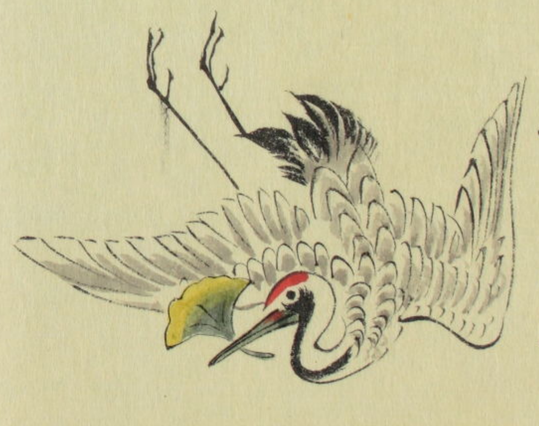
壽狂言之圖

文化元年四月廿日ヨリ三日ゝ間
沛受ゝ不被露

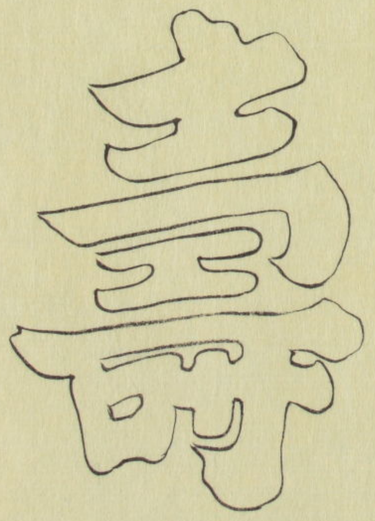
十一代目
中村勘三郎

二頁ヲ一ケンスル
寸法六尺巾三尺五寸

引幕樹色
文字白上り
鶴嵐色の
仕立



寛永元甲子歳
中橋ニ於テ
始而芝居興行



當文化元甲子年迄
及百八十一年

元祖猿若勘三郎
拜受之図於舞臺披露

○金麾

寛永九壬申年伊豆國うら
アタケ丸とゝふ大船入津之節
鋼鉄の音顕相勤る砌
拝受の品なり

○猿若衣裳

慶安四卯年
沸城様に於為石ゝ所拝受 青地金入
禁庭に於為石ゝ砌丸と三桐紫糸縮緬
裾に薄に雪之品拝受

○沸蘭のいけまき

明暦四戊申年勘三郎親子上京
歌舞に達し高貴沸方に新發意を敷
粗云又猿若と申粗意相勤る上京を

森田勘弥

市村羽左衛門

中村明石

矢念し陳元し折節
是を拝受し首尾能き勤
右何も之紫縮緬服紗
也し黒塗蒔絵
公相し入浴黄銅
外服紗三方
かさり物
右猿若口上上京親子
上京したる粗粗云ふ怨猿若先為
歌舞伎しまし又ふ所ゝ
ト名を呼よりてきしし
猿若口上に先し市川海老蔵
相勤し百年
安永年中四代目海老蔵五粗
五代目團十郎白猿五人相勤
七代目團十郎十四才より
没者員如し相叶に後雖者
年存まゝ迄し
麻上京

横に裏返

壽

三絃四人
音唄二人
笛 二人
小鼓
大鼓
右鼓二人
上下紋寿字
モヤウ鶴びゝ

壽 おどり花見

子役座付紅梅之枝
梅之子人

千世八ちよ
いろもかゝらぬ
後盛衰のと
いふ出ー れ奇ふて
おどり

壽 女舞

女形七人

門松

是ハ武ほうこうよ位うとくなるものでをゞゐるヤウ〳〵
ち市冠者寿をまつ
いとれ〳〵ほ〳〵らんの
葉もつくりなしてゐるゝ
ゞ申し〳〵用意いこしてゐると
ゆまてまとち出る足まり〳〵
ちゝ〳〵ゞ茅例のごと〳〵
伯父ほうさゐ〳〵巣末の茅俵
用意ゐ中延て年れ門松を
ちゝうゞひまとゝ〳〵ち中〳〵
いて年れハ立出て立りくと
いそぎ出ゐよちや年りつきて
ゆまてよ出巣末〳〵夜義中上ゝと
ちゝ〳〵ゐ茅〳〵んといふヤイ〳〵ち市冠者
酒をの〳〵でゆけイヤヤ外られまゝ〳〵
ちゝ〳〵まゝうまちよ

中村七三郎

中村助三郎

ハテの〳〵でゆけとはちゝめ
ちゝ〳〵バ一ツ下されてまうり
まちよと盃を取まゝ伯父ほつぎます
是ハけつこゝなほ酒今一ツ下さりゆ
の〳〵でゆけとつぎ張ふち市冠者
きゞんよ〳〵おゞこゐハ又一ツほちゝを
とゝせちゝ〳〵がいこゝ〳〵ちゝ足〳〵
ちゐさゝゝ舞よよ〳〵ほんつゝ〳〵
まゝ何ゞほ酒をゝ下さゝゝ〳〵
今一ツ下さりゆ〳〵のめ〳〵とこつちゝ
かさゝゝて舞〳〵る舞ちゝ
ロイち市冠者仮宿久〳〵〳〵ちゝ〳〵さゝゝゞ
いろふハヤ上方へ行ゝまゝ〳〵ち市冠者
都の者でムるゆ〳〵ちゞ〳〵〳〵〳〵〳〵
〳〵てムるまゝ二度の事でちゝ〳〵
その都のちゝ〳〵ゞきてたん〳〵さゝバ
ほゝ〳〵ゝまゝちゝ〳〵扇をひゞきゝ立上り
是ゝちゝどろゝよ都子とゝほゝ都名所名所をの
一ゝ〳〵〳〵る奇ゝてだとゝ〳〵ゝ

二頁イ
一頁ニ不

りくしく　さらぬは　はれ　中　まもる
立出　が例年　たぢごさるより
はれ上下を　ひさるが今年も
何として下さるぬぞと
立ひる　左帝冠者　まく　いたるぬら
ハアいく　上下分もめまく
さるとのぞして　年うまさよ
ア　たぢごさるハ　一ツ年を
とらせらく　ひくいく
はれ年が　よ　ぜうさと
何く　ア　ねうされ　ねうさて
はれ　中　まうよと　出て
たちこやぢて　分けのひアさし
出　いも　第　よ上下を
そうさるさ　はれく
やりくと　ひくく　失念
上下をく　中　イヤ　ちうを
よく　の　まくすぐ　はれ
中　まうよ　イヤく　帝よかる　清それ

さらく　ばいくきませく　有よりば
ヨりく　帝よ　ちうハア　門松しう
ちうく　ア　所く　ふいく　ひまが　いつく　伯父ちさる
はれ酒を　ひされ　帝例の　はれ
いうきまく　都の　ひく　中上
ひま入ます　と　六角を　ひき
門松の　立く　日　父母の
帝　立く　帝ハ　そうさ　ちうと
百　ア　まを　ちて　有るとう
あるぢ　ちうれ　立　同　立て
三角　ふが　かの上下を　ひて　まよれ
ちうと　帝　まを　見　ちう　左帝　冠者
もしう　ちう　見く　まぢり　中　の　ア　て
ムく　ちうと　入　入まりる
ひく　ちうも　ぢいく　入まよ　幕

二段ノ一段ノ八

猿若

さてもはどちなる者でムる
まろう出るることのハ将軍
何家といふ大名でムる
ムきくたるさる若とも
百仕りとの百人つもりさぶ
白髪爺殿よりまろうてるよう
ゆゑで ゆるつと手ぶきらと
ヤ何〳〵ぞんぞる
猿若さるゑ出るとつもりさぶ
爺殿〳〵いそきさるんと
なるエリ〳〵百人の百
爺つけてれば門もきてひゆふ
出ますそは　入りんとせーぐ
イヤ〳〵爺まいりゆゑ〳〵
爺のきげんをうこびひ
うゆをらう〳〵叶えゆんと

中村勘三郎

和もう　大名ヤア　今度ハなてぬら
北たもをゝ〳〵げこ自分を出ろくて
猿若ゑ有ようくてさてゝさるの
まゝ　ゆゑ〳〵　入らんとしゆゑ
又和もうといひさるゆうくて
てそんまうなとかんぐゆをを
和ゑ〳〵こゝぶ〳〵ろん出る者
ゑり〳〵　ゑ人　たどろき
ちう　ゑたう〳〵〳〵ハア
月ゑ見えぬ和ゑう〳〵　出て
あひまちよイヤ〳〵まつハ
爺〳〵れまゆぬ　いつ〳〵で
出るまのまゝハ爺うまゑよ
ヤアと大名さ〳〵のそゝるる
ゑ〳〵ら猿若が角くゼー
角でひつ〳〵ゆりアイタ〳〵爺の元げ
一つまひ〳〵げとイへ〳〵　やゑう
完ハ二つムりまハ　ゆらて出ろう〳〵
まゝゆゑ　ゆる　月ゑ二つ　ゆる〳〵　叶ゑ猿若

中村七三郎

二百八十三

年宮より ひとり 来り――ハア
他人 あるまじ門よのこ――
をふてゐる何をいひをるヤイ
様若さく コイ こ こ こ ハア 年宮の
ゑもぐ――さぞ面白き事で
ござる――中――出――てきらせん
もの――ませ――ゥ 馬よぬこんを
ゑらうさ ひらうとのうて
ゐるさく ちや なでこうく
ちや なでまんもうれて
ちやなり――

ぬ――いさ――ねどかの――ゥ
まの――かのこのうの袖
一寸――ゑる――ゑ――て 所 紙ゐり
たぐひまらう――者中――
せゐう 大名 こけて アイタ こ こ
ハア はめん――もさい 蛮ぐ
い――こ――まれ ちゃ――よい 見ゐ ゐりまれ
いこむ――ゑ中 見てくき

ハア ワくく――ゐ 嘲よ 蒙れ――くゝ――ヤまれ
なよ 嘲よ なれと あ――ゆ まと――ゑ――ま――ゑ――く
ハア と 紙の ゑ――ゑ――と――よ――ゐ――
大名 ゑ――ゑ――ゑ――て――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――れ――
様若 見――ゐ――ゐ――ゑ――ゐ――ゑ――れ――
大名 おのれめ――― ゑ見 ――く――さて
ゑ――ゑ――ゐ――の 出の 沒をきく――く――い
ハア と――ゑ――ん――せ――ゑ――ゑ――ま――ゑ――く
ゑ――ゑ――ゑ――の 大名 ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――何の事――
ゑ――ゑ――― 出市の事 で――ゐ――ゑ――ま――ゑ――
ゐ――ま――で――ゑ――ゑ――ゑ――何の事――ゑ 毎――ま――ぐ――く――
い――ゑ――事 ゐ――り――く――く――く 又 ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――り

山――ゑ――を――ひ――い――ゑ――ゑ――ひ――く 三――ゑ――ひ――く――
引――ゑ――の 文句 ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――
ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――
大名 ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――
中――ゑ――れ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――
の――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――ゑ――

幕

中村座ゟ當年役者もくなまと春よゟ五之人まゝく
退座せ〜ゝ皇子もいてあらんと思せ〜 ゟ三月上旬ゟ
一の谷の浄るり物語をたゝしめ坂東之浄るり忠度
熊谷二役大切親年回遠音とゝて狂道成る所此事
共をしゝめ大序ゟ切まゝ一人〜ての出語之事特
ゝ作ゝ迄来務〜〜き若者ゝ大入大ゝ昌
〜れハを物ひよ事〜 幾若座甲子年寿物語
皇子の物語江戸中一所限ゟ所ゟ成ゝ寿
物語見物ゝ所ふゝ〜と称四折ゟ〜物語所ゟ
れハ江戸一般の大評判とゝ古風の物語見物事とゝて
初日ゟ物ゝ〜の群集ゟ力ゝ者の報ゝ事ゝ新ゝ
へれと三座ゝ事ゝ又少ゟ

中子四月

萬延二年 辛酉 歳二月中庵一校筆

江戸書簡

結東子